illustration by Naoki Ando

新潮クレスト・ブックス 2022-2023

［エッセイ］
エマ・ストーネクス『光を灯す男たち』

［インタビュー］
ローベルト・ゼーターラー『野原』

いまこそ読みたい、**ウクライナとロシアの本**

ただいま翻訳中！ これから出るクレスト・ブックス

新潮クレスト・ブックス カタログ 1998-2022

SINCE 1998
CREST BOOKS
Shinchosha

essay

photograph © Gareth Iwan Jones

暗い孤立の時代に灯台守が照らす道。

絶海の灯台から三人の男が忽然と消えた――。実在の事件をモデルに、灯台守とその妻たちに起きた人間模様を解き明かす話題作で、第二のデビューを飾ったストーネクス。編集者から小説家に転身した彼女が、なぜ灯台の世界を描いたのかを語る。

エマ・ストーネクス
essay written by Emma Stonex

小川 高義 翻訳
translated by Ogawa Takayoshi

Emma Stonex

1983年、英国ノーサンプトンシャー生まれ。大手出版社の編集者を経て小説家となり、いくつかのペンネームでこれまでに 9作のエンターテインメント小説を出版。初めての文芸作品となる本作は、英大手出版社 Picadorの編集者に絶賛されて出版前から話題となり、発売早々サンデータイムズ紙などでベストセラーにランキングされた。

もし灯台守になったらどうだろう。遠くに離れ、ほとんど隠れ住むと言ってもよさそうだ。そんな職業について、以前の私が思い浮かべたのは、せいぜいカモメが風に舞い飛んで、髭面の海の男がパイプをくわえている、というようなものだった。そんなロマンチックな灯台イメージを持つ人は多いだろう。だが深く知るようになるほどに、実態はまるで違うとわかった。いや、まるで違っていた、と言うべきかもしれない（有人で管理される灯台は、もう消滅したのだから）。

陸地にある灯台、たとえば赤い縞が目立つポートランドビル灯台や、陸続きのランドウィン島に指貫のような形で立っている灯台は、沿岸に愛すべき立ち姿を見せていて、もちろん魅力はあるのだが、とくに私が心を惹かれるのは、沖合の岩礁にある灯台だ。まさかこんなところにと思うような海の中から、堂々たる塔が立ち上がっている。ベルロック灯台、ビショップ灯台、ロングシップス灯台――。かの有名なエディストーン灯台は、プリマスの南沖にあって、その岩礁では四代目の塔が、ほぼ二百年におよぶ努力の結果として立っている。その隣に土台だけ残っているのは、スミートンが設計した三代目の痕跡だ。これを見ただけでも、水は建造物を支えてくれないという当たり前のことがよくわかる。

岩礁の塔は、遠くから見れば、水平線上の幻影だ。ランズエンド岬に立って、ロングシップス灯台を見るとしよう。さほど遠くない。わずか一カイリの距離である。もっと沖へ、ぼんやりした遠くまで目を凝らすと、晴れた日なら、うっすらとマッチ棒のようなものが見えるかもしれない。その名も恐ろしいウルフロック灯台。八カイリの沖にあって、岩礁を吹き抜ける風の唸りが、ウルフという名の由来になっている。現在のイギリスでは、灯台はすべて自動で管理されていて、最後の一基も一九九八年に電化された。その昔は、三人の男が常駐することになっていた。島流しのような職場で、一度行けば二カ月は帰らない交替勤務である。

海の真ん中で、ほかの二人しかいない。部屋は広がらず、縦方向に積み上がる。二歩も踏み出せば突き当たって、もう行き場がない。狭苦しく、薄暗く、汗とタバコと焦げたベーコンの匂いが立ち込める。荒天時にはシャッターを閉じる。窓は二重になっているが、波しぶきが八十五フィートも飛んでくることがある。茶を飲んでいると、その高さの窓ガラスを波がたたく。嵐の最中には、塔の全体が電流を浴びたように揺らぐ。岩が基底部にぎしぎしと迫って、これで倒れないのだから奇跡かと思えた。

執筆の下調べにとりかかった私は、じつは灯台のことを何一つわかっていなかった。子供の頃に、陸の灯台を見たことは何度かあったのだが、たぶん当時はつまらないとでも言っていたのだろう。灯台の魅力に気づいたのは、二十代になってからのことだ。最近、どうして灯台好きになったのかという質問を受けた。それで記憶をたどろうとしているが、行き着くのはワイト島にあった祖母の家かもしれない。階段の窓から、灰色のソレント海峡や、本土側に見えるフォーリー発電所の煙突をながめていた。あるいは学期の中休みに、ノーフォークの泊まれる風車へ行ったせいだろうか。部屋が丸くて、ぐるぐる上がって回廊へ出ると、白い格子形の羽根が、空への梯子のようにきらめいていた。

海図のない水域に漕ぎ出して、ますます深みにはまることになった。灯台守と言われた人たちが、どうやって生きていたのか知りたくなった。どうしてこの仕事について、どれだけの代償があって、ずっと続けていられたのか――。当事者による証言を、できるだけ読んでみた。回想、自伝、また名著と言うべきトニー・パーカーの『灯台』に収録された聞き書きの記録。

そういう生活が好きだから灯台守になった人もいる。いや、好きどころか、必要としたのでもある。海と仲良く暮らして、空模様を読めた。絵を描いて、本を読んで、ボトルシップを作って気晴らしができた。そんな人にしてみれば、灯台は文句なしの孤独、平和、静穏をもたらす。その一瞬に集中して生きる（いまの言葉だとマインドフルネスかもしれない）には好都合だろう。灯台は通りかかる船の安全をはかるだけではなく、勤務する人の安全な居場所にもなっていた。それで淋しくなかったのだろうか。むしろ逆だ。陸地にいると、舵を失った船のようになった。八週間たつと家に帰って、通常の生活に入り込まねばならない。また普通の男になる。夫になり父になる。陸の生活はペースが速すぎる。落ち着かない。むやみに広い。灯台にいれば領域の固定された狭さに安んじていられる。しばらく灯台にいて、陸に帰ったらどうなるか。ついに船を下りたと思えば、脚がふらついて、地面が当てにならない。そんな気分にもなるだろう。

一方で、帰りたくてたまらなかった人もいる。沿岸の灯台か、それなりに大きな島の灯台なら、どうということもなく務まるが、岩礁の灯台だけは苦手である。そこまで特殊な任地だと、隔離されたようで精神がおかしくなる、というこ

エマ・ストーネクス
『光を灯す男たち』
小川高義訳
2022年8月刊行予定
photograph by Tsubota Mitsuteru

とで異動願いが出された例もある。もし私だったらどっちだろうと考えた。一人でいることは好きだ。あまり退屈はしない。海に出て平気かもしれない。それも灯台に魅力を覚えた一因だろうが――さて、どうにか頑張れたとして、僧院のような生活を喜べるだろうか。二〇二一年現在、私たちはみな何らかの形で孤立することに慣らされた。私が考えたいのは、そんな孤立状態をあえて選ぶのだとしたら、その人は、何から、何に向かって、逃げようとするのか、ということ。

調べていくうちにわかってきた。灯台守になる人が、内気、弱気ということはない。ものごとを現実的に考えて、何でも綿密に処理する。それでいて何世紀にもおよぶ伝説につきまとわれる職務でもあったはず。私が気になるのは、ある灯台に補佐として勤めていた男の話だ。塔の入口まで下りて魚を釣っているうちにいなくなった。あっさりと、ただ消えた。波は静かで、鳥の群れが回って、空は青く、まったく異常はない。この世から一人だけかき消えたようなもの。

もう一つ、スモールズ灯台での事件がある。一八〇一年のこと、ある灯台守が死んでしまった。その相棒は、殺人を疑われることを恐れつつ、補給船が来るまで何週間も遺体と過ごすことになった。おぞましい事件を再発させまいと、〈トリニティ・ハウス〉（水先案内協会）は管理上の改善策として、各灯台の駐在員を二名から三名に増やした。そして、さらに、これぞ灯台にまつわる伝説の決定版というべき謎がある。もはや神話の域に近い。一九〇〇年に、アウター・ヘブリディーズ諸島のアイリーン・モア島で、一度に三人の灯台守が失踪した。どんな運命に見舞われたのか、いまなお真相は不明である。そのことが私の小説にとってのインスピレーションになった。

だが灯台守の生き方だけに興味を惹かれたのではない。それぞれの妻にも人生があった。夫の職務に合わせて生きることを迫られた女たち、と言うこともできよう。あてがわれた住宅に暮らして、任地が変われば国中のどこへでも移るしかない。しかしパイオニアだったと言えなくもない。灯台守の女房は、思い通りに家庭を切り盛りした。夫が留守なら、妻が一家の主である。年間のかなりの部分でシングルマザーになっていて、何につけ自分の流儀で決められる。もちろん、さびしい無限の海を見てばかりの、厳しい暮らしではあったろう。私が作家になろうとしたとき、生まれた娘は六カ月になっていた。赤ん坊を抱えて、眠れずに困り果てた長い夜に、遠い灯台を見る心境がわかるような気がした。あっちに夫がいると思いながら、手が届くわけではない。海とは、すなわち距離である。そんなことを思った。現実の距離でもあるし、心の距離でもある。うっかり油断すると、難しい時期に夫婦を隔てる海になる。そういう妻たちの物語に、深い共感を持てると思った。

二〇一八年の夏、デヴォン州のブルポイント灯台へ行ってみた。灯台守の住宅を改装したコテージに、一人で三泊したのだった。曲がりくねる細い道を下って、ぎりぎりまで海に近づいた岬の突端に、住宅がならんでいた。小説家としては、一日ずっと海を見ていると思えばロマンチックな気分だが、しばらく見ていたら、ただ広いだけで無感動な海が、解放感よりも圧迫感をもたらしてきた。それまでの調査で、もう私にもわかっていた。有人の灯台は、浴室の置物からイメージするような灯台とはわけが違う。人間の努力と忍耐が折り重なった貴重な歴史を守ろうとしながら、実地に関わる人々にとっては、光にも闇にもなるものだった。

去年から今年にかけて、ある意味で、私たちはみな灯台守になったのではないか

去年（二〇二〇年）から今年にかけて、ある意味で、私たちはみな灯台守になったのではないかと思えてきた。誰もが自分の塔にいるしかない。わずかでも一緒にいる人がいれば幸運だ。ちらりと遠くに陸地が見えて、再出発の望みもありそうな気がする。いまの生活で知っておいてよいことを、灯台がしっかり教えてくれる。だから私は灯台が好きだ。もし距離があったら越えるがよい。離れるよりは近づくのがよい。暗闇は照らすこともできる。伸ばしてくれそうな手があれば、さびしさは薄らぐ。

“How lighthouse keepers show us the way in dark, isolated times” First Published on The Observer, Mar. 13,2021.

topics

いまこそ読みたい、

ウクライナとロシアの本。

2月24日以降、『ペンギンの憂鬱』を読んでくださる方が急増しました。文学が切実に求められていると感じます。

ペタペタと歩くペンギンの足音と、不気味な組織の影。

舞台はソ連崩壊後のキーウ(キエフ)。売れない小説家のヴィクトルは、動物園から引き取った憂鬱症のペンギン、ミーシャと暮らす。ある日、新聞社から依頼されたのは、まだ生きている大物たちの追悼記事を書く仕事。ところが、書かれた人物たちは次々と奇妙な死を遂げてゆく――。謎の組織に不条理に追われるヴィクトルと、けなげに寄り添うペンギンが人気を博し、クルコフをウクライナの国民的作家に押し上げた世界的ベストセラー。原書は1996年刊行だが、その後も隣の大国の影に怯え続けてきたウクライナの姿を予見しているようにも読める。

ペンギンの憂鬱
アンドレイ・クルコフ
沼野恭子訳 2200円

緑の天幕
リュドミラ・ウリツカヤ
前田和泉訳 4180円

抑圧された社会を懸命に生きる名もなき人々の物語。

いつも文学だけが拠りどころだった――。スターリンが死んだ1950年代初めに出会い、ソ連崩壊までの激動の時代を駆け抜けた三人の幼なじみ、ミーハ、イリヤ、サーニャを中心に、名もなき人々のドラマを描いた大河群像劇。ノーベル文学賞候補とも目されるロシアの女性作家が、強大なシステムに抗する精神を謳いあげた新たな代表作。この長い小説を読めば、抑圧された社会の中で、文学がどれだけ人々の紐帯となってきたかを、そしてウクライナでの戦火を横目に、なぜ大多数のロシア人が声を上げられずにいるのかを感じ取ることができるであろう。

戦地と故郷に別れた二人が再び出会う日まで。

ワロージャは戦地に赴き、サーシャは故郷に残る。恋人たちの手紙には、別離の悲しみ、初めて結ばれた夏の思い出、子ども時代の記憶が綴られている。だが、二人はじつは別の時代に生きているのだ。サーシャが暮らすのは現代のモスクワ、ワロージャは1900年の中国にいて、義和団事件を鎮圧している。――なぜ義和団事件なのかを問われたシーシキンは、かつてこう答えた。「これはすべての侵略戦争のシンボルなんだ」ロシアが新たな侵略を始めたいま、遠く離れた恋人たちを結ぶ愛の確かさ温かさが、よりかけがえのないものとして胸に迫る。

手紙
ミハイル・シーシキン
奈倉有里訳
2640円

interview
photograph © Urban Zintel/laif

Robert Seethaler
1966年、ウィーン生まれ。オーストリアの作家、脚本家、俳優。多くの舞台、映像作品に出演後、2006年『蜂とクルト』で作家デビュー。『キオスク』等で好評を博す。2014年刊行の『ある一生』がドイツ語圏で100万部を突破。グリンメルズハウゼン賞ほか多くの文学賞を受賞し、国際ブッカー賞最終候補にもなった。

悲しみとは生の躍動。

名もなき男の生涯を描いた、この上なく静かな小説、
『ある一生』がミリオンセラーとなり、
国際ブッカー賞候補となったゼーターラー。
パウルシュタットという町に生きた死者たちの声に
耳を傾けた新作『野原』について語る。

ローベルト・ゼーターラー

interview with Robert Seethaler

アンドレア・ゲルク 聞き手
浅井晶子 翻訳
interview by Andrea Gerk　translated by Asai Shoko

ローベルト・ゼーターラー
『野原』浅井晶子訳
2022年10月刊行予定

photograph by Tsubota Mitsuteru

――『野原』は一種の合唱ですね。もはやこの世にいない人たちが、人生を振り返って語りだす。彼らはどこから語っているのですか。

死というのは、ひとつの憶測にすぎません。我々は死について何も知らない。私は死を、我々がイメージを投影するスクリーンのようなものと考えています。でもそれは生者の想像であり、ファンタジーなんです。つまり「死後の生」ですね。この本で語る死者たちがどこにいるのかは、想像することすらしていません。死者はどこにもいないし、同時にどこにでもいる。

――『スプーン・リヴァー詞華集』という一九一五年に刊行された本に、インスピレーションを与えられたそうですね。

刊行当時、とくに学生たちのあいだでカルト的人気を誇った詩集です。三百ほどのごく短い詩が収められていて、なかには死者が詠んだことになっているものもある。私はこの本を、三十五年以上持ち歩いているんですよ。そしてようやく、死者についての私自身の物語を語るときが来たというわけです。

――『野原』は三十ほどのモノローグで構成されています。たった一言の人もいれば、短篇小説なみの物語もあり、それぞれの話が交差します。彼らは同じ町の住民であることのほか、どんな点で結びついているのでしょう？

彼らをつなぐものは「人間らしさ」です。実際、小説の舞台も重要ではありません。山の人間も、海や都会の人間と根本的なところでは変わらない。我々は皆よく似ています。

――『野原』では、以前の作品よりも「死」が大きく扱われていますね。

生について語ろうとするなら、死についても語らなくてはなりません。我々にとって死は、別れに対する恐怖であり、あらかじめ先取りした悲しみです。でも死は、生の一部なんです。死のあとになにがあるのか、我々はまったく知らない。死は、我々への偉大な贈り物だと言うこともできるかもしれない。死がなければ、我々は永遠の生という地獄に存在し続けることになりますから。

――あなたはいつも、「素朴な人たち」を描くと言われますね。

もっとも偉大な感情というのは、しばしば単純な感情です。人生におけるもっとも大きな出来事は、つねに単純な出来事です。深みは単純であり、愛は単純です。少なくとも単純であり得る。まわりの状況が複雑さを生むだけです。ただ「素朴な人間」とはいったいなんでしょう。誰だって、病気や死や、あるいは幸せが懸かっているとなれば、結局は単純な存在になるのではないですか。人の心はつねに単純です。

――どうして、そういう人たちのことがそんなによくわかるんですか？

私は登場人物たちをよく知りません。でも、とにかくできる限り正確に彼らのことを捉えようとしています。つまり、彼らの身になってみる。これ以上はうまく説明できません。私は書くときには、心で書きます。通俗的な言い方ですが、実際そうなんです。

――泣きながら書くこともありますか？

ずいぶん個人的な質問ですね。たしかにおっしゃるとおりですが、同じくらい笑うこともあります。私がときに彼らとともに味わう悲しみは、私にとっては生の証です。悲しみとは生の流れであり、言葉や涙で悲しみが表現されることは、生の躍動を意味するんです。

――多くの感情的なせめぎあいがあるんですね。でもあなたの文体はむしろ坦々としている。あなたの小説はどのようにして生まれるのでしょう？

つらくて厳しくて不快な仕事ですよ。家にこもってひとつひとつの文章を彫りこんで、頭のなかのイメージをできる限り正確に描写しようとするだけです。イメージが湧いてきて、感情が生まれる。でもその感情に抵抗し、身を守らなければならない。文章をできる限り簡素に明快に組み立て、私の中に吹き荒れるイメージを描写しようと心掛けています。

――彫るというのは？

私の父は木彫家で、実際に木を彫っています。彫刻のイメージと執筆が重なるのは、私にとって書くことは楽な作業ではないからです。文章が迸りでてくるなんてことはない。精密さが必要とされる点が、私にとって木彫の手作業と同様なんです。

――あなたにとって大切なのは、素朴で単純な人々に声を与えることでしょうか。

自分が誰かに声を与えるつもりはないし、なんらかの社会的な文脈や政治的な構造に自分を置くつもりもありません。文章が迸りでてくるなんてことはない。精密さが必要とされる点が、私にとって木彫の手作業と同様なんです。私にとって重要なのは、つねに自分がつくりだし、描きだす人間たちの物語なんです。

"Der Tod dient vor allem als Projektionsfläche"
Robert Seethaler und sein Roman "Das Feld"
Deutschlandradio Kultur Archiv, Jun.7, 2018

ただいま翻訳中！

今秋以降に刊行を予定している注目の作品を、
それぞれの翻訳者の方々にご紹介いただきました。
ベルンハルト・シュリンクのいぶし銀のような短篇集や、
『ミッテランの帽子』『赤いモレスキンの女』の作家による
捧腹絶倒のデビュー作が刊行されます。

photograph by Tsubota Mitsuteru

※タイトルはすべて仮題です。

『離別の色彩』

ベルンハルト・シュリンク
Abschiedsfarben by Bernhard Schlink

松永美穂
text by Matsunaga Miho

離別と再会。シュリンクの小説は、これまでにもほとんどが、このテーマをめぐって展開してきた。たとえば、愛した女性の謎の失踪と、法廷での再会、というのが『朗読者』のキモだったことを思い出す。

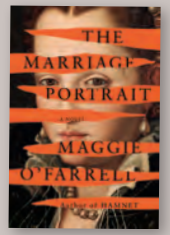
『週末』では出所したテロリストが、友人や肉親と再会した。七〇代になって出版された今回の短篇集では、このテーマについての洞察がさらに深まったように感じる。シュリンクのスタイル、ここに極まれり、というところだろうか。相手が裏切ったケース、自分が出奔したケース、不可抗力だったケース。さまざまな別れがあり、再会がある。「和解」「赦し」という言葉が脳裏をかすめるが、老境に至った人間の選択する道が常にわかりやすいとは限らない。まさに多種多様な離別の色彩を、読者には楽しんでもらえればと思う。鋭意翻訳中、夏の終わりには訳了の見通しです。

（二〇二三年春刊行予定）

『マリッジ・ポートレイト』

マギー・オファーレル
The Marriage Portrait by Maggie O'Farrell

小竹由美子
text by Kotake Yumiko



十六世紀、トスカーナ大公コジモ一世の娘ルクレツィアは、フェラーラ公アルフォンソ二世に嫁ぐも十六歳で急死、夫による毒殺との説があり、肖像画が一枚残されている。

物語は、夫に人里離れた砦へ伴われたルクレツィアが、ここで殺されるのではと怯える場面から始まり、その後の緊迫した展開に過去の経緯が差し挟まれる。両親に疎まれて育った彼女は、実は聡明で心優しく才能豊か。ひっそり穏やかに暮らしていたのに姉が急逝したため身代わりに嫁がされ、権謀術数渦巻く他国の宮廷で、優しいかと思うと残酷な夫に翻弄されながら、早く孕めと圧力をかけられる。芸術家気質の少女の運命やいかに。蔑ろにされてきたシェイクスピアの妻を際立った個性と能力を持つ魅力的な女性として描いたオファーレルが、物語と歴史的事実を今回はどう綯いあわせるかは、読んでみてのお楽しみ。

（二〇二三年春刊行予定）

『この村にとどまる』

マルコ・バルツァーノ
Resto qui by Marco Balzano

関口英子
text by Sekiguchi Eiko

アルプスの峰々を映じる紺碧の湖面から、ロマネスク様式の鐘楼の先端がそびえている。オーストリアとの国境にほど近い南チロル地方に、そんな幻想的な光景で多くの人を魅了するレジア湖がある。

本書は、このダム湖に沈んだ村にとどまり続けた家族の物語だ。イタリア領ドイツ語圏のこの一帯では、ファシズムの時代、母語の使用を禁じられた。言葉を慈しむ主人公のトリーナは、地下墓所（カタコンベ）で子供たちにドイツ語を教え続け、言葉を武器として、ダム建設の反対運動に孤軍奮闘する夫を支える。権力を持つ者たちの理不尽に翻弄されながらも懸命に前を向いて生きてきた夫との三十年を、生き別れになった最愛の娘に向かって語りかけるトリーナの抑えた口調に心が揺すぶられる。

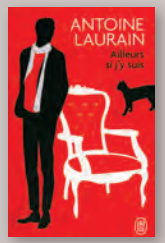
読み終わって本を閉じ、改めて表紙の湖を眺めたとき、瞼の裏にトリーナの姿が立ち現われ、湖底に沈められたものの大きさに思いを巡らせずにはいられない。

（二〇二三年夏刊行予定）

『行けるなら別の場所へ』

アントワーヌ・ローラン
Ailleurs si j'y suis by Antoine Laurain

吉田洋之
text by Yoshida Hiroyuki



九歳にして「古いものには魂がある」と看破した少年ピエール＝フランソワ・ショーモンはパリに事務所を構える弁護士となる。幼い頃に芽生えたモノへの情熱は大人になっても冷めることなく、自宅は彼のコレクションで溢れている。

一方、妻は〈ガラクタ〉に夢中になっている夫にうんざりしていた。そんなある日のこと、彼はパリの老舗オークションハウスで自分そっくりの十八世紀の肖像画を手に入れる。しかし不思議なことに、妻を始め誰一人、肖像画の男が彼に似ていることに気づかない。

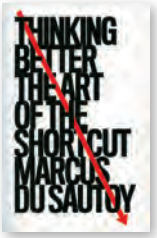
肖像画の男は何者か？こうして始まる時代を超えた探求の旅は〈私〉を遠くへと誘う。史実を織り込んだユーモアたっぷりで奇想天外な展開に読者は圧倒される。〈帽子〉と〈手帳〉というモノから驚異的な物語を紡ぎ出し、世界中の読者を虜にしたアントワーヌ・ローラン作品の原点。二〇〇七年ドゥルオ賞受賞作。

（二〇二二年十二月刊行予定）

『数学という近道』

マーカス・デュ・ソートイ
Thinking Better: The Art of the Shortcut in Math and Life by Marcus du Sautoy

冨永星
text by Tominaga Hoshi



延々と続く長く苦しい作業に直面すると、人は誰でも近道を知りたくなる。『レンブラントの身震い』でＡＩの謎に迫った著者は、この本で、近道の本質に迫ろうとする。決断への時間を短縮する近道、複雑な問題を限りある自分の頭で処理できるようにする近道は、人間の生存にとって不可欠だ。粗雑な近道は命取りになるが、ヒトは、数学という洗練された近道の集合体を駆使してどんどんその世界を広げてきた。著者はこの本で、あらゆる問題に近道が存在するのか、近ければそれでよいのか、といったことを考察し、数学が生みだした典型的な近道を紹介すると同時に、チェロ奏者やスタートアップ企業家、記憶のグランドマスターや歩く哲学者、現代美術のキュレーターなどとの対話を通じて「近道」の多面的な姿を浮き彫りにしている。

（二〇二三年春先刊行予定）

新潮クレスト・ブックスがお届けする102タイトルをご紹介します。
（価格は税込です）

Shincho Crest Books Catalog 1998–2022

千年の祈り
イーユン・リー
篠森ゆりこ訳

長い祈りに支えられた父娘の縁。人生の黄昏にある男女の情愛……。オコナー賞、ヘミングウェイ賞ほか総なめの驚異のデビュー短篇集。

2200 円
590060-1

林檎の木の下で
アリス・マンロー
小竹由美子訳

スコットランドの寒村から新大陸カナダへ——。三世紀の時を貫く作家自身の一族の物語。落ちついた声、天才的な筆捌き。12の自伝的短篇。

2640 円
590058-8

イラクサ
アリス・マンロー
小竹由美子訳

一瞬が永遠に変わるさま。長い年月を見通すまなざし。長篇小説を凝縮したかのような味わいの、「短篇の女王」による九つの物語。

2640 円
590053-3

停電の夜に
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

ろうそくの灯りの下、秘密の話を——。ピュリツァー賞ほか独占！インド系女性作家による驚異のデビュー短篇集。もはや古典的名作。

2090 円
590019-9

朗読者
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

十五歳の少年ミヒャエルが経験した切ない初恋。母親のような年の女性ハンナを失踪させた秘密とは——。衝撃の世界的ベストセラー。

1980 円
590018-2

ハイウェイとゴミ溜め
ジュノ・ディアス
江口研一訳

『オスカー・ワオの短く凄まじい人生』の著者による伝説的デビュー作。全米最優秀短篇に選出された「イスラエル」ほか全10篇。

2090 円
590004-5

記憶に残っていること
アリス・マンロー他
堀江敏幸編

世界最高の短篇小説をこの一冊に。マンロー、トレヴァー、ラヒリ、マクラウド、イーユン・リー……創刊から10年間の全短篇集から厳選。

2090 円
590070-0

見知らぬ場所
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

父と母の、子供たちの、恋人たちの歳月。『停電の夜に』以来九年ぶり、世界待望の最新短篇集。フランク・オコナー国際短篇賞受賞！

2530 円
590068-7

土曜日
イアン・マキューアン
小山太一訳

ロンドン、午前四時。未明の空に火を噴く飛行機。テロか？　それとも？　名匠の優美極まる筆致で描かれる、脳外科医の不穏な一日。

2420 円
590063-2

いちばんここに似合う人
ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

孤独な魂たちが束の間放つ生の火花を、切なく鮮やかに写し取った十六の物語。映画監督としても活躍する著者のオコナー賞受賞作。

2090 円
590085-4

サラの鍵
タチアナ・ド・ロネ
高見浩訳

パリの女性記者と、ナチに連行された少女。六十年の時を越え、二つの人生が交錯する——累計三百万部のベストセラー。映画化原作。

2530 円
590083-0

初夜
イアン・マキューアン
村松潔訳

ずっと二人で歩いていけたかもしれない。あの夜の出来事さえなければ。遠い日の愛の記憶を克明かつ繊細に描く、異色の恋愛小説。

1870 円
590079-3

ソーネチカ
リュドミラ・ウリツカヤ
沼野恭子訳

本の虫で、容貌のぱっとしないソーネチカ。最愛の夫の秘密を知ったとき彼女は……。神の恩寵に包まれた女性の静謐な一生の物語。

1760 円
590033-5

ウォーターランド
グレアム・スウィフト
真野泰訳

土を踏みしめていたはずの足元に、ひたひたと寄せる水の記憶——。ブッカー賞作家による もっとも危険なもっとも愛すべき最高傑作。

3190 円
590029-8

パリ左岸のピアノ工房
T・E・カーハート
村松潔訳

パリの小さな工房で、若き職人が魔法のように再生する名器の数々……。眠っていた音楽とピアノへの愛が甦る傑作ノンフィクション。

2200 円
590027-4

手紙
ミハイル・シーシキン
奈倉有里訳

戦争に行った若者と残された少女。ふたりは百年の時を隔ててめぐり会う。死を超えて、時空を超えて綴られた、瑞々しい愛の手紙。

2640 円
590097-7

女が嘘をつくとき
リュドミラ・ウリツカヤ
沼野恭子訳

夏の別荘で、波瀾万丈の生い立ちを語るアイリーン。ところがその話はほとんど嘘で……。嘘をつく女たちの哀しくも微笑ましい人生。

1980 円
590095-3

オスカー・ワオの短く凄まじい人生
ジュノ・ディアス
都甲幸治・久保尚美訳

オタク青年オスカーの悲恋の陰には、一族が背負った呪いがあった。全米批評家協会賞・ピュリツァー賞をダブル受賞した傑作長篇。

2640 円
590089-2

その名にちなんで
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

長く口にせずにきた思い。愛しい人を遠く焦がれる切なさ。名手ラヒリが精緻に描く人生の機微。ふかぶかと胸にしみる待望の初長篇。

2420 円
590040-3

冬の犬
アリステア・マクラウド
中野恵津子訳

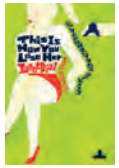
カナダ東端の島で、犬、馬、鷲ら動物とともに、祖先の声に耳を澄ませながら人生の時を刻む人々。生の厳しさと美しさを湛えた8篇。

2090 円
590037-3

シェル・コレクター
アンソニー・ドーア
岩本正恵訳

孤島で貝を拾い、静かに暮らす盲目の老貝類学者を襲った奇妙な騒動を描く表題作ほか、O・ヘンリー賞受賞作を含む鮮やかな全8篇。

1980 円
590035-9



こうしてお前は彼女にフラれる
ジュノ・ディアス
都甲幸治・久保尚美訳

どうしていつも、うまくいかないのか？　浮気男ユニオールとたくさんの女たちが繰り広げる、おかしくも切ない九つの愛の物語。

2090 円
590103-5

アンネ・フランクについて語るときに僕たちの語ること
ネイサン・イングランダー
小竹由美子訳

コミカルな語りに深い倫理性。人間の普遍を描きだす啓示のような物語。フランク・オコナー国際短篇賞受賞作。

2090 円
590101-1

夏の嘘
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

避暑地で出会った男女。癌を患う大学教授。作家とその夫。小さな嘘をきっかけに秘められた思いが溢れ出す。著者十年ぶりの短篇集。

2200 円
590100-4

世界の果てのビートルズ
ミカエル・ニエミ
岩本正恵訳

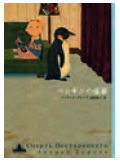
笑えるほど最果ての村で、僕は育った。凍てつく川。薄明かりの森。そして手づくりの僕のギター！　スウェーデンの傑作長篇小説。

2090 円
590052-6

彼方なる歌に耳を澄ませよ
アリステア・マクラウド
中野恵津子訳

18世紀末、スコットランドからカナダ東端の島に渡った赤毛の男がいた——。カナダの「静かな巨人」が描く、愛すべき一族の物語。

2420 円
590045-8



ペンギンの憂鬱
アンドレイ・クルコフ
沼野恭子訳

憂鬱症のペンギンと暮らす小説家ヴィクトル。新聞の死亡記事を書く仕事をきっかけに、身辺に不可解な出来事が次々に起こって……。

2200 円
590041-0

陽気なお葬式
リュドミラ・ウリツカヤ
奈倉有里訳

自分のお葬式が愛で満たされるように願う亡命ロシア人画家アーリクの最期の贈り物とは——不思議な祝祭感と幸福感が溢れる物語。

1980 円
590124-0

夜、僕らは輪になって歩く
ダニエル・アラルコン
藤井光訳

内戦終結後に再結成された伝説の小劇団。十数年ぶりの公演旅行は、ある嘘をきっかけに思わぬ方向へ。ペルー系作家による話題作。

2420 円
590123-3

未成年
イアン・マキューアン
村松潔訳

輸血を拒む少年と彼を救おうとする女性裁判官。運命と信仰をめぐる激しい葛藤、恋にも似た思い。ブッカー賞作家による傑作長篇。

2090 円
590122-6

ディア・ライフ
アリス・マンロー
小竹由美子訳

2013 年ノーベル文学賞を受賞した短篇小説家が、透徹した眼差しと眩いほどの名人技で描きだす平凡な人々の途方もない人生の深淵。

2530 円
590106-6

いにしえの光
ジョン・バンヴィル
村松潔訳

姿を消した人気女優と後を追う老俳優の、奇妙な逃避行。いくつかの曖昧な記憶が不意に新しい像を結ぶ。ブッカー賞作家の新境地。

2310 円
590105-9

美しい子ども
ジュンパ・ラヒリ他
松家仁之編

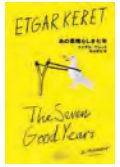
シリーズ創刊 15 周年を記念して、全 101 篇から選んだ傑作短篇アンソロジー。ラヒリ、ミランダ・ジュライ、マンロー、シュリンクほか。

2090 円
590104-2

誰もいないホテルで
ペーター・シュタム
松永美穂訳

森の中の宿で。リノベーションされた工場跡地で。音楽フェスの夜に。心をとらえ、運命を動かす瞬間。スイス人作家による短篇集。

1870 円
590128-8



あの素晴らしき七年
エトガル・ケレット
秋元孝文訳

愛しい息子の誕生からホロコーストを生き延びた父の死までの、悲嘆と哄笑と祈りに満ちた七年。イスラエル作家の自伝的エッセイ集。

1870 円
590126-4

屋根裏の仏さま
ジュリー・オオツカ
岩本正恵・小竹由美子訳

20 世紀初頭、「写真花嫁」としてアメリカに渡った少女たち。そのささやきが圧倒的な声になって立ち上がる全米図書賞候補作。

1870 円
590125-7

甘美なる作戦
イアン・マキューアン
村松潔訳

MI5 の美人スパイと若き小説家。二人の愛は幻だったのか？　自伝的で小説論的。ブッカー賞作家による野心あふれる恋愛小説。

2530 円
590111-0

低地
ジュンパ・ラヒリ
小川高義訳

インド民主化運動のなか殺された弟。その身重の妻をアメリカに連れ帰った兄。愛と失意が織り成す波乱の家族史。待望の長篇小説。

2750 円
590110-3

大いなる不満
セス・フリード
藤井光訳

なぜか毎年繰り返される、死者続出のピクニック。平均寿命一億分の四秒の微小生物。不条理と笑いに満ちた圧倒的デビュー短篇集。

1980 円
590109-7

ジュリエット
アリス・マンロー
小竹由美子訳

母と娘、そのまた娘。届かない互いの思いを諦観とともに描くアルモドバル監督映画化の連作など、ビターなマンロー全開の傑作短篇集。

2640 円
590131-8

四人の交差点
トンミ・キンヌネン
古市真由美訳

異なる時代を生きた四人の喜びと痛みの記憶が、やがて一つの像を結ぶ。フィンランドで記録的ベストセラーとなった、ある家族の物語。

2420 円
590130-1

すべての見えない光
アンソニー・ドーア
藤井光訳

ドイツの若い技術兵と、フランスの盲目の少女の心を繋いだのは、ラジオから流れる懐かしい声だった——。ピュリツァー賞受賞作。

2970 円
590129-5

善き女の愛
アリス・マンロー
小竹由美子訳

誰にも覚えのある家族間の出来事を見事なドラマとして描きだす、マンローの金字塔的短篇集。1998 年度全米批評家協会賞受賞作。

2640 円
590114-1

マリアが語り遺したこと
コルム・トビーン
栩木伸明訳

母マリアによるもう一つのイエス伝。「聖母」ではなく人の子の母としてのマリアが語る、美しく果敢な独白小説。ブッカー賞候補作。

1760 円
590113-4

光の子供
エリック・フォトリノ
吉田洋之訳

私の母は誰なのか——。パリを舞台に、映画と現実を往来するある男の愛の彷徨。ル・モンド紙元編集長によるフェミナ賞受賞作。

1980 円
590112-7

ビリー・リンの永遠の一日
ベン・ファウンテン
上岡伸雄訳

イラクから帰還し、戦意高揚のショーに駆り出された兵士。過酷な戦場と愚かな狂騒の、その途方もない隔絶。全米批評家協会賞受賞作。

2530 円
590134-9

本を読むひと
アリス・フェルネ
デュランテクスト冽子訳

パリ郊外の荒れ地に暮らす文字を知らないジプシーの大家族と、彼らに本を読む歓びをもたらした図書館員。フランスのロングセラー！

2090 円
590133-2

ウインドアイ
ブライアン・エヴンソン
柴田元幸訳

妹はどこへ消えたのか。それとも、妹などいなかったのか？　滑稽でいてひどく切実な、不安と恐怖。『遁走状態』に続く待望の短篇集。

2200 円
590132-5

子供時代
リュドミラ・ウリツカヤ
絵 ウラジーミル・リュバロフ
沼野恭子訳

中庭のあるアパートに住む子供たちが出会った奇跡。「キャベツの奇跡」「折り紙の勝利」等、祝福されたかけがえのない瞬間に心打たれる 6 篇。

1980 円
590118-9

ヴォルテール、ただいま参上!
ハンス＝ヨアヒム・シュートリヒ
松永美穂訳

尊敬と反発、女性関係に金銭トラブル。ヴォルテールとフリードリヒ大王の知られざる素顔を描く、笑いと驚きの新しい歴史小説。

1760 円
590117-2

風の丘
カルミネ・アバーテ
関口英子訳

古代遺跡の夢。ファシズムとの戦い。一族の秘密。イタリア最南端、風の強い丘に暮らす家族四代の物語。カンピエッロ賞受賞。

2310 円
590115-8

五月の雪
クセニヤ・メルニク
小川高義訳

仄暗い歴史を背負う極寒の町マガダン。この土地で暮らす人々の哀しみと喜び。米国注目のロシア系移民作家による、鮮烈な連作短篇集。

2200 円
590137-0

人生の段階
ジュリアン・バーンズ
土屋政雄訳

悲しみの回帰線を超えて——誰かの死は、その存在が消えることまでは意味しない。公私ともに最高の伴侶を亡くした作家の思索と回想。

1760 円
590136-3

ふたつの海のあいだで
カルミネ・アバーテ
関口英子訳

ある日、姿を消した祖父。《いちじくの館》再建の夢はいかに——。イタリアの人気作家が描く、土地に深く根ざした強靱な物語。

2090 円
590135-6

文学会議
セサル・アイラ
柳原孝敦訳

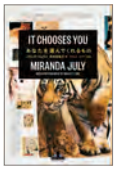
小説家でマッド・サイエンティストの〈私〉は文学会議に出席する文豪のクローン作製を企むが。アルゼンチンの奇才が放つ衝撃作！

1870 円
590121-9

べつの言葉で
ジュンパ・ラヒリ
中嶋浩郎訳

「私にとってイタリア語は救いだった」——夫と息子たちとともにローマに移住した作家が綴ったイタリア語による初エッセイ。

1760 円
590120-2



あなたを選んでくれるもの
ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

映画の脚本執筆に行き詰まった著者は、フリーペーパーに売買広告を出す人々を訪ねる。カラー写真満載、心を打つインタビュー集。

2530 円
590119-6

ミッテランの帽子
アントワーヌ・ローラン
吉田洋之訳

その帽子を手にした日から、冴えない人生は美しく輝きはじめる。1980年代のパリを舞台にした、大人のための幸福なおとぎ話。

2090円
590155-4

ピアノ・レッスン
アリス・マンロー
小竹由美子訳

後のノーベル賞作家は、デビュー時にすでに「短篇の女王」だった。人生の陰翳を描き読者を魅了する名匠の原風景が詰まった作品集。

2420円
590154-7

帰れない山
パオロ・コニェッティ
関口英子訳

山がすべてを教えてくれた。アルプス山麓を舞台に、本当の居場所を求めて彷徨う二人の葛藤と友情を描く、国際的ベストセラー。

2255円
590153-0

ある一生
ローベルト・ゼーターラー
浅井晶子訳

アルプスの山とともに、20世紀を生きた名もなき男の生涯がなぜこんなにも胸に迫るのか。現代オーストリア文学の恩寵に満ちた物語。

1870円
590158-5

トリック
エマヌエル・ベルクマン
浅井晶子訳

プラハに生まれナチス政権下を生き抜いた老マジシャンと、魔法を信じるLAの少年。それぞれの艱難を抱えた出会いが奇跡を起こす。

2750円
590157-8

波
ソナーリ・デラニヤガラ
佐藤澄子訳

わたしの人生にはすべてがあった。あの波が来るまでは―― 2004年、突然の津波で家族を失った経済学者が綴る、絶望と再生の手記。

2200円
590156-1

靴ひも
ドメニコ・スタルノーネ
関口英子訳

40年前の別居騒動を乗り越えたはずの老夫婦の留守宅が襲われ、猫が消えた。普通の家庭に潜む怖しさを見事に描いた衝撃の家族小説。

2090円
590161-5

ケミストリー
ウェイク・ワン
小竹由美子訳

どうしてうまくいかないの？ リケジョのこじれた思いが行きつく先は。ユニークな語りが胸を打つ、愛と家族と人生のものがたり。

2200円
590160-8

わたしのいるところ
ジュンパ・ラヒリ
中嶋浩郎訳

ローマと思しき町に暮らす「わたし」の、なじみの場所にちりばめられた孤独と彼女の旅立ちの物語。イタリア語による初めての長篇。

1870円
590159-2

秋
アリ・スミス
木原善彦訳

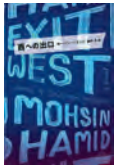
およそ百歳の眠り続ける老人。その人生はEU離脱に揺れるイギリスの戦後史に重なり――奇想に満ちたポスト・ブレグジット小説。

2200円
590164-6

友だち
シーグリッド・ヌーネス
村松潔訳

男友だちを喪った女性作家と主を亡くした老犬。残された時間の中で、狭いアパートにふたつの孤独が寄り添う。全米図書賞受賞作。

2200円
590163-9



西への出口
モーシン・ハミッド
藤井光訳

故郷の戦火を逃れるため、国境を越える「扉」を抜けた若い男女。世界中の移民達の風景も交え、新天地を目指す人生を鮮烈に描く。

1980円
590162-2

サブリナとコリーナ
カリ・ファハルド＝アンスタイン
小竹由美子訳

コロラド州デンバー、ヒスパニック系住区のやるせない日常の中で逞しく生きる女たちを描き、全米図書賞最終候補となった話題作。

2310円
590167-7

アコーディオン弾きの息子
ベルナルド・アチャガ
金子奈美訳

幼なじみはなぜ故郷を捨て、アメリカで没したのか。遺された回想録から浮かび上がる波乱の人生を描く、バスク語現代文学の傑作。

3300円
590166-0

オルガ
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

北の果てに消えた恋人、言えなかった秘密。激動の二十世紀ドイツを生きた女性オルガのひたむきな人生に心揺さぶられる最新長篇。

2200円
590165-3

おじいさんに聞いた話
トーン・テレヘン
長山さき訳

ハッピーエンドのお話はないの？ ロシア生れの祖父が語る悲哀に満ちた人生の物語。『ハリネズミの願い』の作家による愛すべき掌篇集。

1980円
590140-0

オープン・シティ
テジュ・コール
小磯洋光訳

マンハッタンを日ごと彷徨する若き精神科医。時折よみがえる遠い国の記憶。数々の賞に輝いたナイジェリア系作家によるデビュー長篇。

2090円
590138-7

階段を下りる女
ベルンハルト・シュリンク
松永美穂訳

名画とともに異国に消えた謎の女。消そうとして消せなかった彼女の過去とは？ 一枚の絵をめぐるドイツのベストセラー作家の新境地。

2090円
590139-4

ファミリー・ライフ
アキール・シャルマ
小野正嗣訳

家族の暮らしを一変させた、あの夏の事故。意識が戻らぬ兄、疲弊する両親、悲しみの中で成長する弟。愛情と祈りに満ちた家族小説。

1980円
590143-1

ノーラ・ウェブスター
コルム・トビーン
栩木伸明訳

夫を亡くし、21年ぶりに勤めに出たノーラ。慎ましく不器用な主婦が、生きる歓びを見出してゆく姿を母に重ねて描く自伝的長篇。

2640円
590142-4

運命と復讐
ローレン・グロフ
光野多恵子訳

それは結婚という名の壮大な悲喜劇。巧みなプロットと古典劇の文学性を併せ持ち、オバマ前大統領も愛読した圧巻の大河恋愛小説！

2970円
590141-7

知の果てへの旅
マーカス・デュ・ソートイ
冨永星訳

宇宙に果てはあるのか。時間とは、意識とは？ はたして科学は全てを知りえるのか。『素数の音楽』の著者による知の限界への挑戦。

2970円
590146-2

マザリング・サンデー
グレアム・スウィフト
真野泰訳

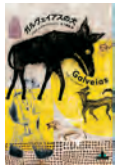
メイドに許された年に一度の里帰りの日曜日、ジェーンの人生は自由の色に輝き始める。ブッカー賞作家が熟達の筆で描く珠玉の物語。

1870円
590145-5

昏い水
マーガレット・ドラブル
武藤浩史訳

70代後半を迎えたドラブルが、同世代の枯れない女たち男たちの老いの姿をいきいきと描く、まさに英国的苦みの効いた長篇小説。

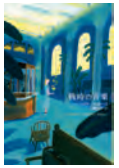
2530円
590144-8



ガルヴェイアスの犬
ジョゼ・ルイス・ペイショット
木下眞穂訳

空から巨大な物体が落ちてきて、村はすっかり変わってしまった。権威あるオセアノス賞を受賞。奇想天外なポルトガルの傑作長篇。

2090円
590149-3



戦時の音楽
レベッカ・マカーイ
藤井光訳

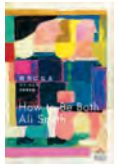
ベスト・アメリカン・ショート・ストーリーズに4年連続選出。戦争と音楽、幻想と歴史の間をたゆたう、短篇の名手による17篇。

2200円
590148-6

憂鬱な10か月
イアン・マキューアン
村松潔訳

胎内から窺い知る、まだ見ぬ人間達の世界。愛と裏切り、そして犯罪の気配。英国の名匠による、苦い笑いに満ちた極上の名篇。

1980円
590147-9



両方になる
アリ・スミス
木原善彦訳

時空を超えて響きあう二つの物語は、虚構と事実の境界を塗り替え、再読時に全く違う姿を見せる。楽しさと驚きに満ちた長篇小説。

2640円
590152-3

変わったタイプ
トム・ハンクス
小川高義訳

世界的名優は、短篇小説のおそるべき名手でもあった！ 人生のひとコマを鮮やかに切り取る、優しさとユーモアにあふれた17の物語。

2640円
590151-6

最初の悪い男
ミランダ・ジュライ
岸本佐知子訳

愛するベイビー、いつになったらまたあなたをこの腕に抱けるの？ どこまでも奇妙でなによりも切実な愛に導かれた、感動の初長篇。

2420円
590150-9

赤いモレスキンの女
アントワーヌ・ローラン
吉田洋之訳

1980 円
590170-7

男はバッグの落とし主に恋をした。手がかりは赤いモレスキンの手帳とモディアノのサイン本。パリが舞台の大人のおとぎ話第二弾。

レンブラントの身震い
マーカス・デュ・ソートイ
冨永星訳

2750 円
590169-1

ゲーム、絵画、音楽――人間固有とされてきた創造する能力。しかしAIの進化がその定説を覆す。創造性の本質を数学者が探求する。

海と山のオムレツ
カルミネ・アバーテ
関口英子訳

2090 円
590168-4

食べることはその土地と生きること。イタリア最南端、カラブリア州出身の作家が、絶品郷土料理と家族の記憶を綴る自伝的短篇集。

地上で僕らはつかの間きらめく
オーシャン・ヴオン
木原善彦訳

2420 円
590173-8

ベトナム生まれの詩人が文字を読めない母への手紙に書いた、母たちと僕の苦難、生きる歓び。全米で話題沸騰の鮮烈なデビュー長篇。

身内のよんどころない事情により
ペーター・テリン
長山さき訳

2255 円
590172-1

会合をドタキャンする為の小さな嘘が、作家の人生を激しく狂わせてゆく。ベルギー発のミステリアスな長篇小説。ＡＫＯ文学賞受賞。

恋するアダム
イアン・マキューアン
村松潔訳

2750 円
590171-4

冴えない男と秘密を抱えた美女の間に割り込むアンドロイド。奇妙な三角関係のゆくえは？人とAIの文明的衝突を笑い飛ばす傑作。

ハムネット
マギー・オファーレル
小竹由美子訳

2750 円
590176-9

史実を大胆に再解釈し、従来の悪妻のイメージを一新するシェイクスピアの妻を描いて喝采を浴びたベストセラー。英女性小説賞受賞。

冬
アリ・スミス
木原善彦訳

2530 円
590175-2

かつて事業で成功し、今は孤独な女性の元に、息子が移民の恋人を連れてきた――英文学の旗手が贈る当世版クリスマス・キャロル。

ウォーターダンサー
タナハシ・コーツ
上岡伸雄訳

3080 円
590174-5

19 世紀のアメリカを舞台に、神秘的な力を持った黒人奴隷の半生を描く。全米図書賞受賞のジャーナリストが挑んだ初長篇。

フォンターネ山小屋の生活
パオロ・コニェッティ
関口英子訳

1980 円
590179-0

世界的ベストセラー『帰れない山』の著者が、舞台となった山小屋での暮らしやモデルの人物との交流を描く。21 世紀版『森の生活』。

レニーとマーゴで100歳
マリアンヌ・クローニン
村松潔訳

2750 円
590178-3

17 歳の少女レニーと 83 歳のマーゴ。終末期病棟で出会った二人が 100 年の人生を絵に描く。デビュー作にして映画化の心温まる物語！

緑の天幕
リュドミラ・ウリツカヤ
前田和泉訳

4180 円
590177-6

スターリンが死んだ 1950 年代からソ連崩壊まで。ロシアを代表する人気作家が、名もなき人々の抑圧下でのドラマを描いた大河小説。

ホットミルク
デボラ・レヴィ
小澤身和子訳

2420 円
590182-0

歩けぬ母の治療のため、灼熱の南スペインを訪れた夏。25 歳高学歴ブアのソフィアは、男と女と出会い、そして本当の痛みと向き合う。

夏
アリ・スミス
木原善彦訳

2750 円
590181-3

ブレグジットからパンデミックへ。激化する分断の中で、人々は歴史を携え旅に出る。人生の奇跡を軽やかに描く、四部作の完結篇。

春
アリ・スミス
木原善彦訳

2530 円
590180-6

相棒を喪った演出家と、移民収容施設で働く女。不思議な少女との出会いが二人に新たな扉を開く。社会の分断を描く四部作の春篇。